

全国アマモサミット2012 in 若狭

2012年11月10日 於 小浜水産高等学校

パネルディスカッション議事録

「海をいかしたまちづくりに向けて」

コーディネーター

松田 治 広島大学名誉教授

パネリスト（五十音順）

木村 尚 海辺つくり研究会事務局長

河野 研 小浜市農林水産課長

樽谷 宏和 小浜市漁業共同組合参事

西野ひかる アマモサポーターズ代表

山野 優人 福井県立大学海洋生物資源学部2年

(松田)

このパネルディスカッションでは、「海をいかしたまちづくり」ということで、小浜市をモデルケースにしながら、会場の皆さんの意見ももらいながら考えて行きたい。小浜市にとっても、参加者にとっても何らかのヒントが得られるものになればと思う。

まずはそれぞれのパネリストの方から、取り組みなどの紹介をお願いします。

(西野)

小浜湾でのアマモの活動は、8年前、高校生達の「目の前の海に潜りたい。もう少しきれいな海に潜りたい。」という言葉で始まった。2月の気温0度、水温10度という吹雪の中、高校生と先生が（アマモの定植のために）海に潜る、それが最初だった。それを見ていた大人たちが、「高校生がこんなに一生懸命しているのに地元の大人が何もしないのは情けない。この気持ちに答えなくては。」と集まったのがアマモサポーターズ。「大変ですね」と言われることもあるが、活動していると、とても楽しいし、気持ちがいい。

市民活動にはできること、できないことがある。3年くらい前、活動が頭打ちし、どうしたらもっと大きく展開していけるだろうと思って悩んだ時期がある。今回、木村さんから「これ以上何がほしいんだ？」と言われて改めて気づいた。よそがよく見えて、自分達の足りないところばかり見えてしまっていた。今回のサミットでは、半年間、実行委員会を組んでやってきたが、力がない分あちこちに頼んでまわり、たくさんの人が助けてくれて、今では大満足している。

(樽谷)

学校給食における地場産水産物の利用推進事業について。H19年の時点で学校給食における地場産品の使用率は32.4%で、水産物に関してはほとんど使用されていない状況だった。海がしけると安定供給できないことと、学校側の調理設備や調理員の不足など様々な要因があった。しかし、関係者で2年間にわたり50回以上の会議を重ね、実現させていった。H23年度の実績としては、内外海小学校や小浜中学校で、アワビご飯やあまがれい、醤油干し、アマダイのガーリック焼き、とびかつちゃん（とびうおのカツ）、水産高校の生徒さんが養殖から携わった鯖を使った鯖フライなどを提供。

この事業を推進するために、熱い思いを持ったパートナーとして水産高校の生徒さんや先生に大変お世話になった。漁業関係者や加工組合等も、目先の利益より将来の利益という視点で全面的に協力してくれた。学校給食は教育。食のプロセスを教え、命をいただくことを子ども達が学ぶ機会になり、漁業関係者も励みになる。また、親は子どもの笑顔が見たいもの。子どもが喜べば家庭でも作ろうとする。そうした相乗効果も期待できる。この事業は継続されていくことと思う。

(山野)

私の父は潜水漁をしており、自分も幼い頃から潜ってきた。潜るのは水深10mの海域。アワビやサザエがたくさん獲れるがその量が年々減っている。磯焼けや海底の貧酸

素現象でアワビが大量に死んでいるのも見てきた。その理由を自分で調べ、地球温暖化による海水温の上昇や山崩れによりたくさんの土砂が魚場に流れ込んでいることを知った。海の現状をよく知り、身近にできることを見つけ、後世によい海を残していくことが大切だと思う。

(木村)

原因は一概には何とも言えない。地球温暖化だけではなさそうだとわれてきている。簡単に温暖化とくくるのは良くない。いろいろな手段で調べるのが大事。

(河野)

小浜市では、小浜湾の「海の健康診断」を実施している。市が主導している事業ではなく、東京の海洋政策研究財団が、小浜湾をひとつのモデルサイトに選んでくれて、その元で実施している。潮の流れ、海水温、塩分濃度、生物、海底の状況の変化や情報の収集をし、昔と比べて環境悪化の原因を突き止め、どうしたら良いかという処方箋まで出す。議論はまだ始めたばかりで探っている段階。アマモサポーターズや、県立大学、水産高校の皆さんも、根本的な原因がわかれば一歩進んだ取り組みができるかと思う。

海をいかしたまちづくりをどう進めていくか。環境、観光、漁業振興、水産加工、海辺をいかした体験活動などについて議論する研究会も立ち上げた（小浜市沿岸域総合管理研究会）。メンバーは漁協、水産、県立大学、林業、観光業、河川、土木、国、県、市など 20 名以上で、いろんな立場で一緒に考えていこうとしている。いい方向に向かっていけばよいと思う。

(木村)

今までの報告を聞いていて、大変うらやましい。神奈川県でも学校給食に地元の魚を出せないかとずっとと言ってきて、最近やっと少し実現したところだ。

アマモとは少し外れるが、地元学をされている吉本哲郎さんと言う人がいる。公害で悩んでいた水俣市で、子ども達が修学旅行へ行くといじめられる、そんな状況に心を痛め、「水俣市民であることに誇りをもってもらいたい」と環境改善を図り、みんなで取り組み全国ナンバーワンにした実績のある方だ。この吉本さんのお母さんの言葉で「環境なんか飲んだことも食ったこともない」という言葉がある。食であったり、楽しくできることが大事。小浜のアマモの活動の原点は「きれいな海に潜りたい」という一言だった。それは大事でその原点を忘れないでほしい。

鉄腕 DASH をしていると「環境が大事だからしているのか？」と聞かれるがそうではない。山口君や城島君が考える「楽しい海辺」をつくりたい。いろいろ調べて、森も海も川もつながっていく、それは素晴らしいが、そこに楽しさがあると多くの人を巻き込んでいく。その中に食が必ず含まれてくる。

私の座右の銘は「因果応報」。自分がやったことは、いいものも悪いものも、必ず自分に返って来る。いいものが返って来る因果応報でありたい。そのために 4 つのキーワードがある。「諦めない」「続ける」「つなぐ」「紡ぐ」そのような取り組みの仕方をして

いくと、結果的に良くなるのかと思う。

(松田)

会場みなさん、今日の感想でも、質問でも何でもいいのでどなたかありませんか。

(森田・(株)東京久栄)

うらやましい状況が展開されていて勉強になった。ひとつアドバイス。2月の極寒にアマモの植えをするのは大変だと思う。アマモの発芽には1～2ヶ月のタイムラグがあるので、適しているのはおそらく12月くらいだろうと思う。高校生が小中学校で出前授業をしている、というのが勉強になった。

(川畑・鹿児島県山川町漁協)

高校生がアマモに取り組むきっかけになったことと、毎年進化して続けて来られている、そのバイタリティは誰から来ているのか。

(小坂・小浜水産高校教諭)

基本的には生徒。アマモも生徒が言い出した。発表を見るとものすごく進んでいるように見えるが、一年で進む進度は小さい。少しずつ新しいことを自分達で取り組み続け、それが積み重なると「すごい」と見える。実際やっている時は何をやっているのかわからないくらい、前に進んでいるのか後ろに進んでいるのか。基本的に子どもたちがやり、機会を僕らが与える。

(鈴木・NPO 法人海辺つくり研究会)

8年前に始めた高校生のその後や、やっている子とやっていない子でどう違うか。

(小坂・小浜水産高校教諭)

取り組んでいた生徒は関連の企業へ行った子もいる。卒業した生徒も手伝いに来てくれる。自分達が勉強したことを、こういう場で発表できるのは、成長のきっかけになる。今はアマモもよく育つようになってきたが、アマモが生長しないときは、「アマモより子どもが成長する」とよく言っていた。

(松田)

高校生が小中学校へ行ったり、大学生と高校生のダイバーが協力している。小・中・高・大学がつながっているのはすごいことで、評価されるべきこと。

(天倉・岡山県日生漁協)

うちのほうは漁業者中心でアマモの再生を始めた。結果的に漁獲につながらないと意味がないということで進めている。小浜では、アマモの再生が進んだことで漁獲量の変化や見なくなった魚がまた見られるようになった、というような成果はあるか？

(松田)

現在「海の健康診断」で、ここ50年ほどの変化のデータを調べているが、アマモの活動は始めたばかりなので、まだ効果は見えていない。漁獲量は全体的に減っている。

(河野)

30年前と比べると4分の1。今は年間1千トン。10～15年前とは変わっていないが、一回の漁で獲れる魚の量が減っているため、漁の回数を増やしてこの漁獲量を維持している。水産資源自体は減っている。

(松田)

魚種も変わっているようだ。

この30年くらいで小浜湾も埋立地や護岸が増えた。三方五湖でも直線の護岸が増え、自然海岸がなくなってきた。その辺りの影響も今後検討していくべき。

(芳田・アマモ種子バンク)

私たちも森川海のつながりを重要視しており、神戸周辺でも住吉川などで流域連携を図ろうとしている。しかし、海、川、森、それぞれで独自にやっていて、お互いが相容れてやっていくのが難しい。若狭では「WAKKA」ということで、地域全体で手を結んでやっているとのことだが、地域の連携をどうやっているのか教えてほしい。

(西野)

若狭は山・川・海・湖が狭い範囲にあり、近くに住んでいてもそれぞれに住んでいるところの自然環境が違う。そのためか、「自分のやりたいことをやる」という小さな団体がたくさんある。しかしそれだと広報やお金の面で大変なので、何かをやる時に「お互いに助け合おう」となってきたように思う。WAKKAの始まりは、寒い中の定植活動で鍋を振舞おうとしたときに、海産物はあるが野菜がない。お金がないので、野菜を作っている人に声をかけて手伝ってもらい、そこで海と里がつながった。小さい街なのでお互いの顔が見えやすいということもあると思う。1つ1つの活動は小さくても、一緒にやってみると驚くほど大きなことができたりして、そういった感じで自然につながってきた。

(木村)

バッファの役割を高校生が果たしているところが、相当大きいと思う。大人ばかり集まっている団体の活動は負担が大きくなる。自分のところには来てほしいが、よそのところに行く余裕はないという連続になってしまう。でも気持ちだけはつながっていきたい。「森・川・海がつながった結果として、こういう成果が出た」という結論を共有するなど。また、相手の舞台に乗らないと先に進まないなあ、と思う。

話を戻すが、日生で30年やられてきて、こんな成果が出ているという話はみんなを勇気づけると思うのでお願いしたい。

(天倉・岡山県日生漁協)

瀬戸内海の漁獲は少量多品目。アマモ場ではアイゴがたくさん獲れる。松茸とアイゴが秋の味覚だったが、50年くらい前から少なくなり絶滅状態だったが、昨年自然発生

した。地元の人は高齢の方を中心に喜んでいた。

日生町はカキが特産。2年前の猛暑の年はもう駄目かと思ったが、アマモがたくさんあり、海中に酸素を供給してくれて斃死を免れた。毎年アマモの種を撒いており、まるで生えない年もあるが、継続することで安定的に造成しているので、みなさん、頑張ってください。

(松田)

「わかをつなげていく」ということで、行政的なこととして、小浜市では湾岸の総合的管理の研究会を立ち上げたが、そのあたりの話を河野さんから何かありますか。

(河野)

行政、民間、たくさんの参加で今議論を進め始めている。それ自体は素晴らしいことだが、懸念もある。それぞれの立場での意見は正しいが、議論を突き詰めれば突き詰めるほど、対立点、矛盾点が出てくるように思う。その時どうするか。今日話を聞いて、楽しさを追求し、そこを忘れずにしていくことが、うまくやっていくうえで大事かと思った。

(氷見高校・生徒)

富山県氷見高校の水産科では定置網の漁業体験を10年以上しているが、ここではどんなことをしているのか。

(樽谷)

小浜では水産高校の生徒さんも定置網漁などいろいろな実習をしている。また、小中学生の漁業体験の受入れでは、ブルーパーク阿納という施設では釣ってさばいて食べるという活動ができる。

(工藤・神奈川県)

アマモサミットの立ち上げ県として、常設の事務局がないことがアキレス腱だと思っていた。そんな中で5年間バトンが途切れずに開催が続いてきたことを素晴らしいと思う。来年は宮城県での開催の声があり、再来年は青森県でやりたいとの声の水産課から上がっている。もし、ここで了解がいただければ、その方向で動いていくが。

(西野)

小浜でこのサミットを開催する話をいただいてから大変だったが、様々な関係機関と協力し助けてもらい開催することができた。もう少し、全国的なバックアップ体制を整えれば、開催地の負担も軽減されると思うので、この経験を来年の宮城、再来年の青森につなげていけたらと思う。

(松田)

再来年は青森での開催ということでよろしいですね。

では、最後にパネラー一人ずつ、まとめの言葉を。

(樽谷)

ソーシャルビジネスで農林水産業が連携して小浜をよくしていくことを考えたい。また、県立大学をもっと活用するなどしていききたい。様々なところに視察に行つて学ぶことがたくさんある。小浜市は湧水を活かした市民が誇りを持てるまちづくりを。

(河野)

海をいかしたまちづくりということで、今まさに動き出したところである。行政は、なかなか動かないが、一度動き出したことはなかなかやめない。継続して形にしていきたいと思う。予算も人も少ない中で応援できることは限られているが、みなさんで行政が動きやすい環境をつくっていただけると、もっと進んでいくと思う。

(山野)

現在、海のことは勉強途中だが、もっと地元にも目を向けて、自分が何ができるかを考えて、地域の活性化に取り組んでいきたい。

(西野)

大変贅沢なシンポジウムだった。全国から様々な活動をしていろんな知恵を持った人達が集まってくれて話をしてくれた。この地域だけでは解決できないこともあり、外からの力をもらいながら、皆さんに応援団になってもらい、私達も応援団になりながら、今後もつながっていききたい。そんなきっかけができたサミットだった。

(木村)

アマモサミットを始めて5年。最初は「アマモって何?」「増やしてどうするの?」と、みんなてんでバラバラで右往左往していた。今回、熟度が上がったことを感じた。みんなでこれからも進化させていけたら。アマモということだけでなく、アマモを含めて、水産業の問題や生物多様性、生態系保全という視点で、これからも全国の皆さんと一緒に続けていけたらと思う。

(松田)

この短い時間のディスカッションの中で、何か結論が出る、というわけではないが、様々なキーワードが出てきて得るものがあつたと思う。小浜は森川海が近く、それらが名水でつながり、人の輪もできて来ているようなので、それらが更につながっていくといいと思う。

今日は長時間にわたり、ありがとうございました。

(以上)